

## 母の爪

備前市木谷 梶藤 繁美

心臓発作で苦しくなった母が、岡山のS病院に緊急入院したのは夏も終わりの頃でした。集中治療室に一週間いた母は、なんとかもち直してくれ病室に帰ることができました。もうダメなのではないかと覚悟していただけに嬉しさでいっぱいでした。

それから二か月になろうとする闘病生活は、私たち姉弟にとって試練の日々となりました。

母は苦しきから酸素マスクをはぎとったり、点滴の管を抜いたり、あげくのはてに排泄管までも抜いたりするのです。そのたびに看護師さんが駆けつけてこなければなりませんでした。私たちは毎日交替で病室に泊りこみ看病をしました。母が暴れるために病院から要請されたのです。二週間を超えると体力も限界になり、付き添う方もフラフラになります。互いに励まし合いながら何とか乗り切ることができました。

一か月も過ぎたころ、母は少しずつ状態が良くなってきました。そうなるにつれて家に戻りたいとしきりに訴えます。良くはなつたけれど、帰宅することはとてもできそうにありません。私の顔を見るなり懇願する日が続いていました。

ある日の夕方、病室を訪ねると車イスに布団を積んでいて、これから帰りたいと言つてきかないのです。婦長さんや担当医の先生も交えて説得がはじまる騒ぎとなりました。それは街の灯りがともるころまで続きました。

岡山の最先端技術が整っており、働いている人たちの意識も高い病院で、毎日のように繰り返られる母の帰宅騒ぎは、恥ずかしいやら申し訳ないやらで平身低頭の毎日となりました。

何回も話し合いが行われ、今帰れば命の保証はないと主治医のU医師から何度も言われました。それでも帰ると言い張る母に、U医師は仕方なく帰宅を許してくれたのです。案の定、三日もすると心臓が痛くなり息苦しさを我慢できなくて、病院へ駆け込むことになりました。

母は舞い戻ったベッドの上で点滴を受けながら、すっかり打ちひしがれていました。母の手をさすると、痩せ細り骨ばった指には、はめていたはずの指輪もどこかで抜け落ちたのかなくなっていました。指先の爪

は思いもかけず細長くきれいで、驚きを隠せませんでした。

「お母ちゃんきれいな爪じゃあな、私は横に広がっていて不細工なのに」

「どれ見せてみ、ありやあ、こりやあひどいなあ、あんたはお父ちゃんに似たなあ、私に似りやあよかったのに可哀そうじゃなあ」

私とは似ても似つかない爪がそこにはありました。六十五年の月日が経つ中で、まじまじと見た母の爪でした。母も初めて気付いたかのよう to 言うのです。私は指も太いけれど特に爪が人前に出せないほど形が悪いのです。母は働き者でした。人一倍農業をする傍ら、煉瓦会社で働いてきた手でした。性格の全く違う母と娘は爪の形でさえこんなに違っているのかと、いまさらながらに啞然としました。

私は思春期の頃にこのことで大いに悩み苦しみました。ふとした時に人前に出す自分の手が恥ずかしくなることがよくありました。社会人になると母はお茶を習うように私に命じました。こんな不細工な手をお茶席で見られるのかと思うと身がすくむ思いでした。母に逆らう事ができなくてしぶしぶ通った思い出があります。

結婚もし、子供も産んでいつまでも気にしてはいられなく、いつしかそのことは意識の外になっていました。しみじみ見ればそれなりに慈しめる手であるようにも今では思えます。

病院に行くたびにさする母の手はなぜかいつも冷たいのです。八十九歳になって大病を患いベッドに座るのさえ難しかった母が、今では酸素マスクも外して話せるまでに回復しています。点滴も三、四時間になつて楽になりました。いつか家に帰れるその希望だけで母は生きています。意地がぶつかり合う母娘でしたが看病を通して母がいとおしくなりました。

母の細くなつた手をさすり、綺麗な形の爪を見ていると、いろいろあつたけどよく頑張ってきたね。

生きてくれてありがとうと言いたくなるのです。

けん玉

神根小学校二年 山田 柊生

カチ カチ カチ

ぼくは

けん玉のこの音がすきなんだ

カチ カチ カチ

音をきくと

やれるっっておもうんだ

カチ カチ カチ

きょうもいっぱい

音をならすよ

カチ カチ カチ

けん玉さん

いい音

たくさんならすから

よろしくね

みつけた！

日生中学校一年 東 風輝

ピュン！ スポツ！

本当にやりたいことが何なのか・・・

みつからなかったぼくの心を打ち抜いた

やっどみつけた！

やっどみつかった！

ぼくのがんばりたいと思うこと

一本一本の矢に気持ちを込めて

スポツ！

よっしゃー

スポツ！

あーつくそー

気持ちのエレベーターは上がったり、下がったり

うれしい気持ちとくやしい気持ちを行き来する

でも、気持ちを込めて矢をはなつしゅん間がたまらない

やっどみつけた！

ぼくのやりたいと思うこと

がんばるぞ

アーチェリー

## 猛 暑

備前市東片上 竹内 千恵子

夕暮れどき

鉢物に水を与えていた

黒い物がヒラ ヒラ ヒラ

あれ！

目を凝らしてみると

ウスバカゲロウ

毎年のように 姿を見せて

目の前を行ったり来たり

逃げよとしない

黒の喪服姿で：

会いに来てくれたんだ

ランの葉に止まり

羽を広げて閉じて

盆には 仏壇にお参りするから

夫婦で帰って来てよ

母の好きな鶏頭の花

盆までに立派に咲かそう

菜園で大きく育っている

第三回備前市文学賞 短歌 入選作品

【小学生の部】

伊里小学校一年 嶋 悠花

ひまわりはたいようがすきおなじかおむけてにつこりきらきらひかる

【中学生の部】

日生中学校三年 萩原 悠斗

蟬しぐれ机に向かう背中押し課題とりくむ応援となる

【一般の部】

備前市蕃山 青山 幸子

ただ命あるだけでいい退院の夫としみじみ新茶味わう

農業にドクターストップかかりたり夫悔しかる鋤使えぬは

この夏が正念場なり病む夫のうたゝ寝の顔そつと伺う

第三回備前市文学賞 俳句 入選作品

【小学生の部】

日生東小学校五年 芳田 凜

赤とんぼ真っ赤な空をつれてきた

たんぽぽよわた毛に変身風の旅

水遊び妹も私もびしよぬれだ

【中学生の部】

伊里中学校三年 室田 祥太郎

水平線猛暑の海でゆらいでる

アジサイの葉の上にあるダイヤモンド

夏の田で音符が出世し合唱者

【一般の部】

備前市香登本 小橋 弘正

二段づつ磴<sup>とつ</sup>登りゆく卒業子

踏み込めぬ程の草丈刈り始む

すずきの  
芒野や備前美作分かつ河

第三回備前市文学賞 川柳 入選作品

【小学生の部】

西鶴山小学校三年 太田 凧 咲

あきのそらカラスがいちわさみしそろう

【中学生の部】

日生中学校三年 橋 本 梨 瑚

ありがとう君と出会えたこの奇跡

【一般の部】

備前市西片上 松 本 君 江

弾む毬持って生きてる余生です

春を待つじつと我慢のこぼれ種

恵まれた日々を天災奪いとる